

社会を震撼させた無差別殺人(口)地下鉄サリン事件(1995年3月)に至ったオウム真理教による一連の凶悪事件の裁判が先頃、終結した。今後の焦点は、死刑が確定した教祖・麻原彰晃(本名・松本智津夫)と実行犯12人の刑の執行に移る。だがこれを、事件の幕引きとしていいのか。オウム事件に深く関わった人々に聞く。1回目は「オウム真理教家族の会(旧称・被害者の会)の永岡弘行会長(79)。

永岡 弘行 オウムの真実を語る 会長



永岡会長

オウム裁判終結

事件の核心 今後の課題

オウム事件の裁判が全て終結したことで、事件の風化が急速に進むことを懸念している。私たちの会では、オウム真理教に入信した家族を取り戻す活動に加え、麻原以外の実行犯12人の死刑を回避するための啓発活動をしている。死刑が執行されてしまえば、オウム事件の本質を解き明かす貴重な証言が失われてしまうからだ。

私は死刑囚となった実行犯との面会を続けている。彼らは異口同音に「死にたい」と言う。私はそんな彼らに「死んでもない話だ。お前自身は死んだら楽だろう。だが、お

「現世の親子は、前世の敵同士。だから離れよ」と親への憎しみを教え、親から子どもを奪った。そして、その財産も奪い取った。

「純粋な若者ほどオウム真理教の教義は、麻原の歪んだ憎しみの上に仏教らしきものを被せただけのものだったのだろう。最初は、

「それこそが、オウム事件の最も恐ろしい核心だ。一つ間違えば、誰もがそうなり得る」ということだ。オウム事件とは、麻原という憎しみの権化に操られた、普通の心優しい若者たちが起こした凶悪犯罪だと言える。

「きれいな心そのままでも人間は人を殺せる」ということは、誰でも条件さえ揃えばそ

原に最も深く騙され、死刑囚にまでなってしまった者たちの証言が絶対に必要だ。

実行犯の証言を再発防止教育に

「実行犯を操った麻原彰晃という人間を見ていると、なぜここまで人を憎めるのだらう」と思う。常軌を逸した憎しみがなければ、あそこまでできるはずだ。人のために、死んでいながら、その若者たちに実行させたのは憎しみの行いでしかない。麻原はまず

「純粋な若者ほど、きれいな、優しい心を持っていて、若者はだまされやすい。だんだん憎しみの行へと導いていく」という布教の構造がある。私は説法会で、麻原に何度も会っている。その弁言には、詐欺師独特のわかりやすさがあった。これに騙され

「死にたい」といって、このまま麻原に騙された彼らを殺してしまっているのだらうか。この世から消し去ってしまっているのだらうか。事件から二十数年経っても、日本

「人のために尽くしたい」と願っていた自分たちがどうして騙されたのか、死刑囚となった彼らに生涯をかけて語り戻してほしい。オウム事件の核心である、純粋な若者たちが騙されていった過程は今も未解明のままだ。一見、正しい宗教の衣を着ていた。憎しみの

「オウムの後継団体である「ブレ」や「ひかりの輪」も活動を続けている。オウムの若者向かわせの責任は、私たち大人にある。もう一度、同じ過ちを繰り返してはならない。」

麻原以外の死刑回避を

「オウムの後継団体である「ブレ」や「ひかりの輪」も活動を続けている。オウムの若者向かわせの責任は、私たち大人にある。もう一度、同じ過ちを繰り返してはならない。」

「オウムの後継団体である「ブレ」や「ひかりの輪」も活動を続けている。オウムの若者向かわせの責任は、私たち大人にある。もう一度、同じ過ちを繰り返してはならない。」